

生徒の主体性を伸ばす探究活動を目指して ～探究活動のカリキュラム検証・教員集団の形成に向けて～

東 晃司¹, 山中 健太¹, 栞田 元気², 小野 靖幸¹

1 京都府立木津高等学校 2 京都府立南陽高等学校

1 はじめに

本研究は、先行研究で開発したカリキュラムを検証し、探究活動を前向きに指導できる教員を増やす取組を行ったものである。

AIの進歩による Society 5.0の実現や、将来の予測が困難な VUCA(変動性, 不確実性, 複雑性, 曖昧性)の時代へと突入している現代社会の中で、探究活動の必要性は増している⁽¹⁾⁽²⁾。こうした時代において、自らキャリアを切り拓く社会人基礎力の育成は喫緊の課題である⁽³⁾。教育の現場に目を向けると、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に実現する令和の日本型学校教育の構築が進められている。その中核を担う総合的な探究の時間(以下、総探)には、各教科の学びを統合して深い学びへと直結させる役割が期待されている^{(4)~(6)}。高等学校教育の在り方ワーキンググループでは、“これからの教育課程の在り方として、総探を教育課程の基軸に据えながら、各教科・科目等の相互の関連を図る中で高等学校生活全体での学びの充実を図ること”と総探を位置づけており⁽⁷⁾、その重要性は今後もさらに高まっていくと十分考えられる。

一方で総探の運営においては、学校現場での課題が散見される。リクルート進学総研の調査において、“総探をカリキュラムの中核に位置づけている”という回答が、関西地方では30%を下回っていた⁽⁸⁾。しかし、探究的な学びに取り組む児童生徒は学力調査の平均正答率が高い傾向があり⁽⁹⁾、探究活動が中核にならない現状は、学力にも影響を及ぼしている。また組織に目を向けると、“組織的に教員が総探に取り組むことによって、児童生徒が効果的に学ぶことができる事例を取り上げながら、総探の授業は校長のリーダーシップの下、全教職員で行うもの”とされている⁽¹⁰⁾。しかし、ベネッセ教育総合研究所の調査では、70%を超える教員が、“熱心な教員とそうでない教員の差の大きいこと”と“教員間での指導ノウハウが共有されない

こと”に課題意識があると答えている⁽¹¹⁾。この課題は進学校、中堅校、進路多様校で共通の課題であることも示されている。こうした組織としての対応の難しさも顕在化しており、最終的に一部の教員への負担が集中する事態へ陥っている現状がある。また教員の年齢層の偏りがある中で、若手教員への知識や技術の伝達が困難との指摘もあり⁽¹²⁾、これは総探の授業ノウハウについても例外ではないと考えられる。

以上の学校現場での課題を踏まえ、本ラボ「探究を探究する会」では、勤務校での実施を想定した探究活動のカリキュラムの開発を目標に活動を行った⁽¹³⁾。4校の先進校の視察を通して知見を深め、カリキュラムの提案と令和6年度の実践の改善を行った。活動の結果、組織に対し、①コアメンバーの育成、②教員1人あたりの生徒数の削減、③教員研修の実施を挙げ、カリキュラムに対し、①主体性を引き出すカリキュラムへの改善、②評価手法の確立の計5つの提案を行った。組織とカリキュラムの両面の改善の試みは、令和7年度以降の課題となった。また、視察や情報収集、カリキュラムの開発を通じて、公立・私立ともに改革を進めていることを目の当たりにし探究活動の黎明期であると感じた。他校の実践が日々改善されていく中で、継続して情報収集の必要性や、実践の検証、改善が重要であると考えた。さらに、総探の授業ノウハウを同僚にも広めていくことで生徒の学力伸長に繋がる。

昨年度の課題を踏まえ本ラボでは、「カリキュラム」と「組織運営」の二点を中心に取り上げて検証を行う。「カリキュラム」については、第1期に開発したカリキュラムをもとに持続可能な総探の運営と評価に関する検証を行う。検証の過程で改善を行い、より確立したカリキュラムの「型」を目指す。「組織運営」については、学校の枠を超えた授業実践に関する交流、教員集団づくりを行う。組織的かつ円滑に探究活動を進めるため、開

発したカリキュラムを実践できる教員を育成することで、学校組織として総探を運用できる体制づくりが可能になると推察する。また、先進校の視察を含めた情報収集を継続して行い、新たな知見を取り入れながら「カリキュラム」と「組織運営」の改善を目指す。そして、総探を運用するための教員研修、特に若手教員に向けた教員集団づくりについての展望を示す。

2 研究の流れ

以下の2点を並行して研究を進めた。

1点目は、総探において昨年度のカリキュラムの持続可能性を検証するため、改善を加えながら再現性を検証する。また評価の方法や妥当性について検証を行う。

2点目は、若手教員育成を兼ねた情報収集のための先進校を視察し協議を行う。防災を取り扱うに当たって、東日本大震災の震災遺構および被災地域にある高校や、先進的な取組を行っている高校を視察する。

以上の2点をもとに、開発したカリキュラムの持続可能性と教員研修を含めた教員集団づくりのあり方について検討する。

3 カリキュラムの概要

3.1 対象・内容

カリキュラム検証は、本ラボ代表者が所属する京都府立木津高等学校(以下、本校)特進エリア(1学年定員40名)の1年生を対象に行う。総探は1単位、主担当を該当クラス担任(ラボ代表者)と副担任(ラボメンバー)の2名で運営する。

扱うテーマは、本校の学校経営方針を踏まえ、「地域への働きかけ—より良い地域を目指して—」を大枠とし、「防災」を主たる教材として扱う。また、高大連携として関西大学社会安全学部との連携を昨年度に引き続き継続する。

3.2 開発したカリキュラムの運用

本カリキュラムは、VUCAの時代に対応するため、図1の目指すべき生徒像の概念図のように、社会人基礎力を基盤とした「4つの力」(前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力、発信する力)の育成を目指す。

本カリキュラムにおける学習状況の評価は、事前に「4つの力」に対応する文章を作成し、各生徒が最も成長が見られた力の文章を選択して記述する。本年度は、毎時間ごとに生徒および担当教員が授業展開を振り返り、「4つの力」のうちどの力が身につけられたかを記録する。担当教員は記録をもとに授業改善を行う。

4 視察

表1に視察を行った高校を示す。視察は、防災に関連した高校、探究活動に先進的な取組を行っている高校を選定して視察を行った。

4.1 宮城県南三陸高等学校

宮城県本吉郡南三陸町にある公立高校である(図2)。宮城県初のコミュニティスクール、また地域連携型中高一貫校であり、南三陸町内にある中学校2校とのつながりが深く、南三陸町とタイアップした学校運営がなされている。本ラボの構成メンバーと親交のある第3学年主任の先生にご対応いただいた。



図1 目指すべき生徒像の概念図

表1 視察校一覧

学校名	公/私	所在地	特徴
宮城県南三陸高等学校	公立	宮城県本吉郡南三陸町	震災資料室を設置
名城大学附属高等学校	私立	愛知県名古屋市	MJ 探究の実践(R8年度以降)
名古屋経済大学市邨高等学校	私立	愛知県名古屋市	市邨ゼミの実施
麗澤瑞浪中学校・高等学校	私立	岐阜県瑞浪市	Discovery Study など多彩なプログラム

1年生ではポスター発表、2年生では冬に開催される「まちづくり議会」を目標としたカリキュラム設計をしている。人口減少などの漠然とした内容ではなく、南三陸町(地元地域)を題材とし、具体的な課題について扱う。また、年に3回「ふるさと南三陸を学ぶ講座」を実施し、南三陸と深く関わりのある人の講話を受けることで、地域理解を深めている。南三陸高校は大半が南三陸町出身の生徒たちであるが、地域みらい留学を用いた全国募集も行っており、全国募集生が出身地にはない南三陸町の魅力を発見し、活躍している。原則、学年所属の教員が主体となり総探の授業を担当している。大半の教員がいずれか学年に所属する(兼部)ため、結果的に大半の教員が探究活動に関わる。一方で、年度によって指導内容に変更等が見られ、専門分掌主導へと体制を変えることを検討している。また役場や町内の企業などとの地域連携は、校長が行っている。

南三陸高校は、地理的にも地域との繋がりが深く、連携中学校や役場、地域の企業、学校運営協議会メンバーとの連携の延長線上で探究を運営している。また評価については、向上した生徒の資質と取組内容を選択することで文章評価が出力される仕組みを設計し、担当者で差をなくし適切な評価を行うとともに、教師の負担軽減がなされている。

4.2 名城大学附属高等学校

愛知県名古屋市にある私立高校である(図3)。令和3年度よりSSH(4期目)の指定を受けている。令和8年度の1年生より、学科再編で普通科と総合学科が統合され、普通科の複数あったコースも1つのコースに再編される。学科再編後、1年生は「MJ探究」「MJスタディ」という探究活動を意識した学校設定科目をおき、2年生以降は32も



図2 宮城県南三陸高等学校

の「MJラボ」が設置され、教員の専門性を活かした指導を実施していく予定としている。また、同級生、教員、先輩、後輩による「360度評価」を導入し、自己の取り組みについてメタ認知を促す仕組みを整えている。

組織的に探究を進めるため、探究担当の教員を配置したワーキンググループにて改革案を作成することを軸にして、組織的に展開できるようにしている。資料をアーカイブ化することで、新担当者となった場合でも、円滑に授業が行える仕組みを構築している。1年生の探究は担任が行うため、学年主任が中心となってデータの引継ぎを行っている。2年生以降の探究授業は、担当を複数人にするなど、人事配置にゆとりをもたせながら、多くの教員が探究に関われるように工夫されている。資料の共有、緻密に構築されたカリキュラムによって、どの教員が担当した場合においても、スムーズかつ探究の質を担保される仕組みを構築されている。そして探究をする学校風土の中で教員が生徒実態に合わせて授業を行える環境が整えられている。

4.3 名古屋経済大学市邨高等学校

愛知県名古屋市にある私立中学校・高校である(図4)。平成30年度の学習指導要領改訂に合わせて授業改革を行い、ゼミ形式の探究活動を実施している。

「生徒が楽しめる授業」を目指し、グループワークや探究的な学びを教科教育へ積極的に導入している。探究活動では、教員の教科の専門性だけでなく、多様な経験を活かしたゼミを設置し、「生徒が挑戦する」ことを重視している。そのため、生徒が自らアポイントを取って外に出るなど、生徒が主体となって活動を進めていた。

教職員に目を向けると、教員の失敗を許容する



図3 名城大学附属高等学校

風土が見受けられ、管理職は積極的に教員の挑戦を促し環境整備に努めていた。「教員の成長や失敗を生徒に見せることは生徒の成長にも繋がる」という教職員全体のスタンスのもと、若手教員が自らの強みを発揮できるような環境であった。

名古屋経済大学市邨高等学校は、授業改革を進める中で、探究活動に力を入れた経緯がある。そのため、探究活動が学校改革の中核として位置づけられ、チャレンジすることに積極的な学校風土が、教員や生徒の個性、能力を伸ばしているように感じた。ゼミや生徒主体で企画する修学旅行などの取組を見ても、生徒が自ら判断する機会を多く設けていた。こうした取組の積み重ねこそが、探究活動や授業、学校組織にも反映されているように感じた。

4.4 麗澤瑞浪中学校・高等学校

岐阜県瑞浪市にある私立全日制の中高一貫校である(図5)。設置学科は普通科のみではあるが、広大なキャンパスを生かし、敷地内でゴルフやキャンプなどを教育プログラムとして実施している。2026年度からアントレプレナーシップコースを新設する。探究学習では「卒業まで100人超の大人と関わる」ことを推奨しており、地域行政や企業との連携などにも力を入れている。土曜日課外活動(Discovery Saturday)では指導教員の専門分野を生かした独自の探究活動が行われている。

教科教育の中にも探究的な取組を取り入れており、文学国語では「授業を通じて形成された概念を「作品化」する」というテーマで、太宰治の「待つ」、夏目漱石の「吾輩は猫である」を用いて、無駄についての哲学対話を促す授業を実践していた。特筆すべきは、レゴブロックを通して表現するものであったことである。レゴブロックで表現した上でプレゼンを行うことで、「習得型の学び」から「探究型の学び」に発展させる点が興味



図4 名古屋経済大学市邨高等学校

深かった。生徒の探究活動の発表や授業見学、先生との協議を通して、普段の教科教育の中で探究的要素を加えることの重要性を改めて認識させられた。

4.5 視察後の所感

4校の視察を通して、カリキュラム的側面、組織的側面での所感をまとめる。

カリキュラムに関しては、探究のサイクルを何度も回すことによって探究を深化させていること、それを通じて自己の枠組みが広がっていくように設計されている点である。学問分野によって探究の深め方のプロセスは異なるものの、社会と関わりを持ったり、原典をたどったり、実験を行ったりするなど、分野によって適した行動が探究の中で行われていた。また、総探での探究活動と、普段の教科教育は別物として捉えがちであるが、現在の高校教育では“自己の在り方生き方を考えながら課題を発見し解決していく力”を育てていくことが求められている⁽¹⁰⁾。そのために、普段の教科教育の中で必要な知識・技能をインプットする「習得型の学び」だけでなく、自分事として学ぶ「探究型の学び」が重要となる。普段の教科の授業の中で、エピソード的な学びや自分たちで内容を決める実験、質問づくり(QFT)、生徒の個性を引き出す課題、経験知をはたらかせるテスト問題などの小さな探究的要素を取り入れることが重要であると考ええる。探究活動を進める中でも、教員主導の展開と生徒主導の展開のバランスを取りながら、より生徒が主体的になる仕掛けや展開が必要であり⁽¹⁵⁾、今後も生徒の実態に応じて改善を進める。

組織に関しては、多くの教員を巻き込む仕組みがあることである。今年度視察で訪れた学校では、教員の専門性を活かした探究活動を実施していた。南三陸高校に関しては「地域」という起点は



図5 麗澤瑞浪中学校・高等学校

あるものの、自然や観光、商品開発やミュージックビデオの作成など多岐にわたるため、ここでも教員の専門性が活かされる工夫がされていた。また、担当教員がのびのびと探究活動に取り組むことができるという裁量が与えられる一方、管理職のリーダーシップによって探究の方向性が示され、担当者に丸投げにならない仕組みがつくられていた。総探の充実化は管理職のリーダーシップによって引き出されるようにも感じた。

5 カリキュラムの検証

前年度提案したカリキュラム、及びカリキュラムを踏まえ、かつ生徒の実態に合わせつつ検証を行う。

5.1 検証方法

カリキュラムは2つの事項を検証する。

まず第1に、持続可能なカリキュラムであるかを検証する。先行研究で開発したカリキュラムの実践を記録し、開発したカリキュラムとの差異を明らかにする。

第2に、評価手法を検証する。発表や成果物などで定点観測的に評価を行う手法⁽¹⁴⁾に加え、毎時間ごとの生徒の振り返りをもとに、「4つの力」の育成を確認する。客観的評価と主観的評価を使い分け、評価手法の確立を目指す。

2つの事項の検証のため、「4つの力」について、「教員が授業実施後に実践内容を鑑みて伸ばしたと考える力」と「生徒が授業後に最も身についたと思う力(自己評価)」を記録した(表2)。教員の認識と生徒の認識からカリキュラムの妥当性を検証し、評価手法を模索する。

5.2 カリキュラムの実践

先行研究で開発したカリキュラムは防災を主たる教材とし、3年間の計画で指導を行う(図6)。

開発したカリキュラムの「型」は、防災以外の教材にも転用も想定されたものである。

本研究では、先行研究で構築された1年次のカリキュラムの検証を行う。表3に示す令和7年度の計画と指導結果を考察すると、3年間の計画から逸脱することなく、指導内容に沿って指導ができたと考えられる。一方で、以下の3つの要因で計画の変更を行った。

① 生徒の実態の違い

昨年度に比べ、主体的に取り組む生徒が多かった。これは、1学期の成果物や授業での反応から明らかであった。

② 指導内容の一部変更

生徒の実態を踏まえ、中間報告にて1年生も発表の機会を設けた。探究のサイクルを体験する機会を設けることで、より深い探究活動に繋がれると考えたものである。また、2学期以降も生徒の実態を考慮し、ワークシートを再検討することとなった。

③ 授業時数の違い

総授業時数が、昨年度の29から今年度は25に減少した。そのため、調査にかける時間が短くなった。しかし、1学期は1回分多く、中間報告での発表が可能であるとの判断に至った。

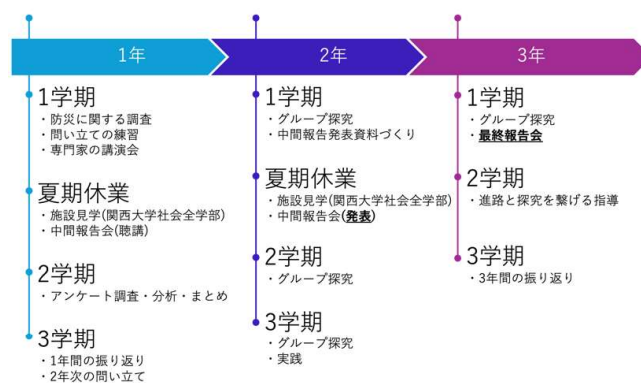


図6 3年計画の概略

表2 「4つの力」の振り返り

項目	Action	Thinking	Team work	Presentation
教員の振り返り： 「4つの力に関連したと考える授業数」	10回	17回	15回	8回
生徒の振り返り： 「授業で最も身についたと思う力の自己評価」	79回	163回	155回	62回

表3 令和7年度1年総探実践記録・計画

回数	指導内容	令和7年度実施記録・計画	Action	Thinking	Team Work	Presentation	令和6年度実施記録
1	探究とは何かを知ろう	オリエンテーション					オリエンテーション
2	探究するものについての知識を仕込もう	災害について考える① 防災を学ぶことが何につながっているのか考える (東日本大震災講話)	○	○			災害について考える① 防災を学ぶことが何につながっているのか考える(東日本大震災講話)
3		災害について調べてみよう① 災害の種類をできるだけ多く挙げ、どんな被害が出るか想像させる	○	○			災害について調べてみよう① 災害の種類をできるだけ多く挙げ、どんな被害が出るか想像させる
4		調査方法の指導 調査の種類と注意点を知る			○		災害について調べてみよう② (2限連続) 東日本大震災を例に、災害によって「どんな影響が出たのか」考える
5		災害について調べてみよう②(1回目) 東日本大震災を例に、災害によって「どんな影響が出たのか」考える		○	○		災害について考える② (2限連続) 近藤ゼミ講演会
6		災害について調べてみよう②(2回目) 東日本大震災を例に、災害によって「どんな影響が出たのか」考える			○		○
7	探究するための技術を習得しよう	災害について考える② (2限連続) 近藤ゼミ講演会		○			はてなを使いこなそう② 問いに対して肉付けをする
8		はてなを使いこなそう① 様々な角度から考え、問いを立てられるようになる		○	○		はてなを使いこなそう③ 問いに対して奥行きを持たせる 探究全体を見通す
9		はてなを使いこなそう② 「課題設定(問い)」と「情報収集」・「整理・分析」をつなげる	○		○		調査方法の指導 調査の種類と注意点を知る
10		はてなを使いこなそう② 「課題設定(問い)」と「情報収集」・「整理・分析」をつなげる 検証・発表資料作成	○	○	○	○	
*		中間報告会					
10	関西大学訪問を振り返ろう リフレクションから、望ましい探究の姿を考える	○	○		○	関西大学訪問を振り返ろう リフレクションから、望ましい探究の姿を考える	
11	探究のルートを見てみよう ～プチ探究～	問いを立てよう① -問いから探究の流れをイメージする-		○	○		オリエンテーション 問いを立てよう (問いから探究の流れをイメージする)
12		前回のアンケート調査の結果を分析する -現状を把握し、新たな問いを生み出そう-(個人)	○	○			アンケート調査① アンケート調査の中身を考える (社会と繋がる調査の準備する)
13		前回のアンケート調査の結果を分析する -現状を把握し、新たな問いを生み出そう-(グループ)	○		○		アンケート調査② アンケート調査の中身を決定する (アンケートをブラッシュアップする)
14		問いを立てよう② -前回の結果の分析を踏まえて問いをつくりだす-		○	○		アンケート以外の調査① 道筋を立てて調査しよう (アンケート以外の調査方法を知ろう)
15		問いを立てよう③ -アンケートをつくる-			○	○	アンケート以外の調査②
16		問いを立てよう④ -アンケートをブラッシュアップする-	○	○	○		アンケート以外の調査③
17		プレゼンテーション資料の作り方 -発表資料の作り方・注意点を知ろう-	○	○	○	○	調査の整理・分析① 調査内容をまとめ、考察しよう (考えたことをまとめ、次のステージへ)
*		生徒アンケート実施					
18		プレゼンテーション資料を組み立てる			○	○	調査の整理・分析② 発表をブラッシュアップする (大学でも通用する発表のやり方)
*		保護者アンケート					
19		今回のアンケート調査の結果を分析する -アンケート結果から新たな視点・価値を生み出そう-		○	○		アンケート調査③ アンケート集計(データから何が分かるか)
20	発表資料づくり	○		○	○	調査の整理・分析③	
21	発表			○	○	発表資料作成①	
22	2年生に向けて探究の問いを立てよう	強度のある問いを作る -最初にして最大の関門突破へ-(1回目)		○			発表資料作成②
23		強度のある問いを作る -最初にして最大の関門突破へ-(2回目)		○			発表① 質疑応答(ストライクゾーンを狙って)
24		*問いづくり					発表②
25		*問いづくり					発表③およびリフレクション
26							グループ編成と調査分野の決定
27							問い作りを意識した調査分野の調べ学習
28							問い作り・見通しを立てる①
29						問い作り・見通しを立てる②・まとめ	

* : 執筆時点で未実施

5.3 評価の検証

表4の「4つの力」の振り返りから、割合を分析すると(図7, 図8), 「4つの力」の割合の大小が一致し、差も最大3%以内となっており教員と生徒の評価が一致していることが確認できる。また、「Thinking」と「Team Work」に偏った内容になっていることが確認できる。2年次で自らテーマを決定しグループで探究を行うことを鑑みると、3年間の指導で偏りなくの「4つの力」が育成できると考えられる。

令和7年度の文章評価は、最も伸びた「4つの力」に連動する文章を用いる。図7, 図8からも教員と生徒の評価が一致していることから、生徒の自己評価をもとに対応する文章の評価案を作成する。その後、生徒の成果物から相違ないか確認することで確定する。また、中間報告や発表、生徒観察をもとに、主体的で対話的な深い学びを実現するため、生徒へのフィードバックを適切に行う。フィードバックを行うことで生徒の主体性を促し、生徒の自ら「4つの力」を育むことができると考える。評価の具体さと曖昧さを両立させる

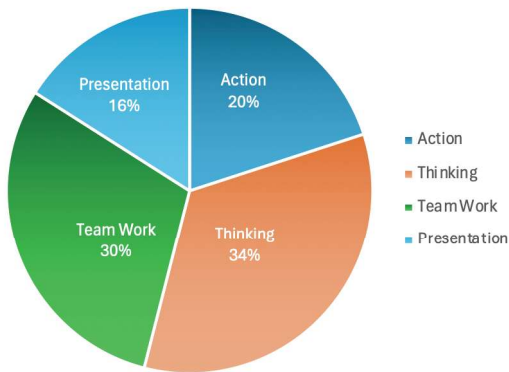


図7 教員の振り返りによる4つの力の授業の割合

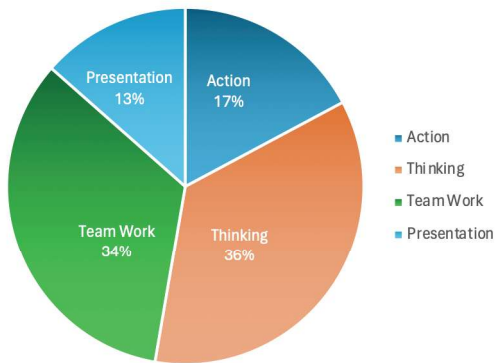


図8 生徒の自己評価における4つ力の授業の割合

ことで探究が深化し、客観的に根拠のある評価、また教員の負担軽減に繋がると本研究で確認できた。

5.4 所感

カリキュラムの検証を通じて、最も重要なことは「目指す生徒像」であると考えられる。「目指す生徒像」と指導内容を確立した現在、このカリキュラムはどの学校・教員にも、再現可能だと考える。ただしワークシート等の詳細は、担当者が生徒の実態に応じて改変、新規作成を行う必要がある。

評価についても、生徒が授業毎に自己評価を行うことで、教員が行う探究活動全体の評価に繋げることができる。さらに、本質的な指導は多くの事例⁽¹⁶⁾⁽¹⁷⁾から、生徒への日々のフィードバックであることは示されており、評価の信頼性へも繋げることができると思う。

6 組織運営

組織運営では、学校の枠を超えた交流をもとに、教員集団づくりを行った。表4に示す概要で、本校と京都府立南陽高等学校が合同で勉強会を実施した(図9)。本ラボの構成メンバー以外にも2名の参加があった。また、若手教員の実践報告および「悩んでいること」を共有し解決のアイデアを協議することで、教員間での指導ノウハウの共有に繋がったと考える。

また、5節で報告した先進校への視察も教員集団づくりに寄与したと考える。これは視察先との繋がりにとどまらず、若手教員が先進的な実践や熱意を持って取り組む教員に触れる機会をつくることで、日々の探究へのヒントや前向きに取り組むきっかけとなると考える。

表4 勉強会の概要

日時	2025年11月12日17時30より
場所	京都府立南陽高等学校
参加者数	9名
内容	学校ごとに1名選出して①～④の流れで実施 ① 自己紹介[1分] ② 実践の概要[5分] ③ 実践で悩んでいること (議論のお題)[5分] ④ 議論[15分～20分]

これらを踏まえ、本ラボの活動そのものが教員集団づくりの場となっており、探究について深め交流する場とし機能していると考える。

7 今後に向けた考察と展望

令和8年度以降の実践を見据えて、提案を整理する。

7.1 カリキュラムの考察と展望

今年度の総探の実践により、評価手法を含め、より確立したカリキュラムの「型」を定めることができた。評価についても、客観的評価と主観的評価を使い分けることで、運用の仕組みを定めることができた。「4つの力」を踏まえた目指す生徒像や教材「防災」を扱ったが、新たな目指す生徒像や教材を選択し、本校以外にも転用した場合においても「型」の再現可能であると考え。一方で今年度の実践を通じて、探究のカリキュラムは「完成しない」ということも実感した。生徒の実態や社会情勢の変化すること、前年度までの総探の深まりの蓄積などから、同一の指導内容を用いることは不可能であるという結論に至った。探究の「型」の形成にとどまることで、「誰でも指導できるカリキュラム」へと昇華できると考える。探究活動を前向きに指導できる教員を増やすため、先行研究でも提案した総探の指導経験者の育成

表5 育成計画

	1年目		2年目		3年目	
	主担当	副担当	主担当	副担当	主担当	副担当
1年	A*	B	C	A*	F	C*
2年			A*	D,E	C*	G,H
3年					A*	D,E

*：指導経験者



図9 勉強会の様子

が、課題であることが改めて表面化した。育成方法は、前年度の担当者(主, 副いずれか)が実施年度の副担当となり、授業改善の補助を行う。表5の育成計画をもとに探究活動の指導経験者が、そうでない教員とペアになることで、指導経験者を増やしつつ実践を蓄積することができる⁽¹³⁾。

7.2 組織運営の考察と展望

今年度の研究の過程で、教員集団の形成を始めることができた。

教員集団を広めることで探究活動の知見が広まり、協議の際に新たな視点を獲得ができる。また、“熱心な教員とそうでない教員の差が大きいこと”についても勤務校の枠を超えることで環境が変化し、モチベーションの維持・向上などにも繋がると考える。そのため、本ラボでも表4に示す概要のような、教員が繋がる機会となる勉強会の開催を検討している。今後は、本ラボでの繋がりをもとに教員集団を広めていくことを継続し、探究活動のさらなる促進に繋げる。

8 おわりに

本研究では、カリキュラム検証と組織運営に重点を置き活動した。4校の視察によって知見を深め、昨年度に開発したカリキュラムを1年次の総探にて実践し、検証を行った。また、若手教員の視察への同行や勉強会など、教員集団づくりを行った。検証の結果、より確立したカリキュラムの「型」を定めることができ、教員の客観的評価と生徒の主観的評価を使い分けながら、評価手法の確立ができた。また視察や勉強会の実施は、総探の指導者育成に一定の効果を得られた。

総探は教育課程の中で独立するものではなく、教科教育と深く関わるものである⁽¹⁶⁾。これは総探が充実した教科教育の実施に当たって力を発揮

表6 勉強会の概要

日時	2026年3月3日 13時30より
場所	京都府立南陽高等学校
内容	① 木津高校の実践報告 ② 議論 ③ 南陽高校の実践報告 ④ 議論 ⑤ 参加者同士が実践交流する機会

するものと考えられる。また、各教科の教員が目指す生徒像のもと探究的な取組を取り入れた授業を行うことで、よりその効果が得られるものと推察する。こうした観点から今後は、本ラボの研究成果を踏まえた「総探と教科教育の横断的実践」と継続した「教員集団づくり」を行う。この2点の充実を学校現場において図ることで、これからのVUCAの時代を生き抜く生徒の力の育成へと繋がるのが期待できる。そのため、今後も本活動を継続し、探究活動・探究的な取組の研究を深めていく。

参考文献・引用文献

- (1)内閣府：科学技術・イノベーション基本計画(2021)
- (2)文部科学省：教育振興基本計画(2023)
- (3)経済産業省：「我が国産業における人材力強化に向けた研究会」(人材力研究会)報告書(2018)
- (4)文部科学省：「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)(2021)
- (5)独立行政法人教職員支援機構：「令和の日本型学校教育」の構築を目指して(2021)
- (6)文部科学省：高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 総合的な探究の時間編(2018)
- (7)文部科学省：高等学校教育の在り方ワーキンググループ審議まとめについて(2025)
- (8)リクルート進学総研：高校教育改革に関する調査2024 報告書(2025)
- (9)文部科学省：文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「生活、総合的な学習・探究の時間WG」『総合的な探究の時間に関する目標・内容の構造化等について(前提となる諸論点の整理)』(2025)
- (10)文部科学省：今、求められる力を高める総合的な探究の時間の展開(2023)
- (11)ベネッセ教育総合研究所：高等学校の学習指導に関する調査2021(2022)
- (12)文部科学省：公立の小学校等の校長及び教員としての資質の向上に関する指標の策定に関する指針(2025)
- (13)東晃司・山中健太・柘田元気・徳本将思・小野靖幸：生徒の主体性を伸ばす探究活動を目指して～地域の実態に対応した探究活動のカリキュラムの開発～、京都府総合教育センター令和6年度研究紀要(第14集)(2025)
- (14)田村学：学習評価、株式会社東洋館出版社、pp. 106-127(2021)
- (15)佐藤浩章：高校教員のための探究学習入門 問いから始める7つのステップ、株式会社ナカニシヤ書店、pp. 17-21, pp. 29-32(2021)
- (16)石原浩一・泰山裕：フィードバックと振り返りが学習者の認知欲求に及ぼす影響の検討、日本教育工学会論文誌、44巻1号(2020)
- (17)関西大学：教職員対象研修講座「探究学習をどう理解し、実践するか～デザインから指導方法、評価まで～」(2025)
- (18)文部科学省：総合的な学習・探究の時間に関する目標・内容の構造化等について(教育課程部会 生活、総合的な学習・探究の時間ワーキンググループ資料2)(2026)